

CA1
EA947
B71
#31 Sep. 1980
DOCS



カナダ経済特集

1980年9月
No.31



EXTERNAL AFFAIRS
AFFAIRES EXTERIEURES
OTTAWA
OCT 21 1980
LIBRARY / BIBLIOTHEQUE



トピックス——2
 カナダ経済の現況——4
 カナダ経済の回顧と展望——4
 資源産業と資源加工産業——6
 カナダの製造業——8
 外国直接投資と対外投資——9
 事業移民に優遇策——11
 グレイ大臣、自動車工場の進出を要請——11
 カナダ特派員日記①・橋田忠明
 米国がクシャミをしても——12
 エッセイ・コンテスト入選作
 鍋田さんのこと 橋明美——13
 私の心の中のカナダ 片岡法子——14
 カナダ日系史を読んで・平野敬一——15
 カナダ人の発明発見(Ⅳ)——16
 編集後記——16

五千万ドル相当の通勤電車 ボンバルディエ社が米国から受注

モントリオールに本社をおくボンバルディエ社は、このほど米国における今年最大の都市間輸送機器の注文を獲得した。

この注文は、ニュー・ジャージー州の通勤者輸送用に五十七台の高速度鉄道車両を建造するというもので、契約高は五千万ドル。さらに五十八台の車両を追加するというオプシオンもあり、これが実行されると、総額は一億ドルを超えることになる。

この鉄道車両はコンピュータ自動制御方式で、車輪はタイヤ。従来の鉄道車両より速度、安全性ですぐれているという。

ボンバルディエ社では、また最近、初めてアメリカの全国鉄道旅客公社（アムトラック）にLRC（軽量・快速・快適）都市間乗客輸送用列車を引渡した。LRCは、ボンバルディエ、ハミルトンのドミニオン・ファウンドリーズ・アンド・スチールおよびモントリオールのアルキャン・カナダ・プロダクツの三社が共同開発したもので、油圧動力バイキング・システムが車両に組込まれているのが特

徴。電子感度計の命令で動く自動安定装置が遠心力を消し、カーブで高速を出していても車両の水平を保たせることができるようになっている。

「オー・カナダ」が正式の国歌に

事実上カナダの国歌として歌われてきた「オー・カナダ」が、カナダ建国の日の七月一日、下院議会にて正式に国歌として定められた。

「オー・カナダ」はフランス系カナダ人のカリクサ・ラバレーが百年前に作曲したもので、英仏両語で歌う。

憲法改正で討議 連邦と各州政府

一八六七年に英国議会が制定したカナダの憲法「英領北アメリカ条例」に対する最終権限を英国からカナダに移し、同時にその内容をカナダの現状に合わせて大幅に改正するための協議が、連邦政府と州政府の間で行なわれている。

憲法の「カナダ化」および改正に関する連邦・州間の話し合いは、過去にも何回かなされたが、いずれも改正の方向や内容について合意に達しなかった。
新憲法について特に論議の的に

なっているのは、カナダ連邦の形態（カナダを各州の「自由連合」と規定するかどうか、など）、権利憲章、公用語、地下資源や沿岸の海底資源、通信、漁業、経済運営、といった分野における連邦政府と州政府の権限、あるいは平衡交付金や家庭法の問題。中でも、資源の所有権を中心とする連邦と州の権限分割の問題、ケベックにおける英語、その他の州におけるフランス語の保護などが焦点になっている。

在日カナダ実業人協会 十月十日にダンスパーティ

在日カナダ実業人協会（CBAJ）では、十月十日午後六時半から、東京のヒルトン・ホテルでダンスギビング・デー（感謝祭）ダンス・パーティを開く。参加ご希望の方は、カナダ大使館のメル・マクドナルドまたは岡島までご連絡されたし。会費は一人一万円。バンクーバーまでの航空券など、沢山の景品も用意されている。
なお、CBAJでは、このほど役員改選を行ない、新会長にカナダ・インベリアル・バンク・オブ・コマース東京駐在事務所のマーク・L・ベイツトコウ代表を選出した。

水中翼船でナイアガラ見物

トロントの棧橋を出発して、すばらしいトロントのスカイライン

を見ながらオンタリオ湖を横断、十九世紀のたたずまいを残す対岸の美しい避暑地ナイアガラ・オンザ・レイクへ……。今年五月、二百人乗り、世界最大の水中翼船三隻が就航、トロントからナイアガラ・オンザ・レイクまで、一時間二〇分の快適な航海が楽しめるようになった。ナイアガラの滝はそこから約二十五キロのところにある。



毎年五月中旬から十月末まで、毎日六〜八便が運航される予定で、料金は片道一等二〇ドル、二等一七・五ドル。

米国のテレテキスト実験に カナダのテリドンを採用

カナダが開発した文字図形・情報システムTeletext（テリドン）が、米国の最初のテレテキスト実用実験に利用されることが決まった。テレテキストとは、テレビをコンピュータに接続し、文字や図形を家庭などに伝達する多重放送技術。またテリドンは双方方向テレビ・シ

ステムで、利用者はボタン装置（キーパッド）を操作してコンピュータから必要な情報を得ることができるようになっている。情報は文字または図形として、改良されたテレビの画面に映し出される。
実用実験は、首都ワシントンでPBSテレビ網のWETA局が今年末から実施するもので、米公共放送協会（CPB）、全米科学財団、米国電気通信情報庁および連邦教育省が後援する。実験の企画・管理には、ニューヨーク大学芸術学部のオールタネット・メディア・センターがWETA局と共同で行なう。

実験では、テリドン・テレテキスト受信機をあらかじめ決められた家庭およびいくつかの公共の場所に設置し、各種の情報サービスに対する一般の反応を評価する。オールタネット・メディア・センターでは、特に人的要因を重視することに注力しており、そのため端末機には使用状況を記録し、要求のあった情報のページ番号や、時間などの情報を収集するモニター装置が特別にとりつけられることになっている。

アメリカがテリドンを実験用に選んだのは英国のフレステルおよびフランスのアンティオプよりいくつかの点ですぐれているためだという。例えば、テリドンはテレビ画像がより鮮明で、曲線を描いたり文字と色を重ねたりすることができ、プレステルやアンティオプ型は、文字とごく大ざ

カナダ経済の現況

カナダ経済の

回顧と展望

一九七〇年代のカナダ経済は、西側先進諸国の中ではかなり高い実績をあげた。これはとくに国民総生産（GNP）の伸び、雇用創出、インフレ抑制、輸出の増大などによく現われている。だがカナダも、他国と同様に、重大な経済問題に直面しており、今年には経済成長が鈍化、インフレもある程度高進し、失業圧力が増すものと見られている。

しかしカナダの豊かな資源、投資機会、競争力再建などを考えあわせると、一九八〇年代のカナダは世界水準よりかなり高い成長を見込むことができよう。

豊かで巨大な国

一九七九年におけるカナダの国民一人当りGNPは、経済協力開発機構（OECD）加盟二十四か国中、第十一位であった。米国は九位、日本は十三位である。同年のカナダのGNPは、欧州共同体（EC）九か国の平均とくらべても、ある程度高い。

国土の大きさという点では、カナダと並びうるのはソ連だけである。カナダは

先進工業国の中では一番大きな国だし、世界全体で見てもソ連に次いで大きい。東西の幅が五千キロを超え、九百九十二万二千三百三十平方キロという面積をもつ。それだけに非常に快適な五大湖近辺や太平洋岸、肥沃な大平原地方、険しい山岳地帯、湖沼が点在する湿地帯、そして北部の未開の原野と北極のツンドラ地帯……と気候もさまざまだ。北の国といわれるカナダだが、その最南端は米国カリフォルニア州北部と同じ緯度にあると聞いて、意外に思う人も多いだろう。

七〇年代の実績

一九六九—七九年のカナダのGNP平均成長率は四・二パーセントで、OECDに加盟しているヨーロッパ諸国の平均三・二パーセントよりかなり高い。米国はわずか二・九パーセントにとどまった。この十年間に先進工業国の中でカナダを上回ったのは、日本だけである。インフレとのたたかきもまず成功した部類に入る。一九七〇—七九年のカナダにおける消費者物価上昇率は、年七・四パーセント。これは、OECD主要七か国の年平均八・〇パーセント、全加盟二十四か国の八・四パーセントより低い。日本の消費者物価指数は過去二年間は四パーセント弱と低かったが、七〇年代を

主要先進諸国の経済指標比較(%)

	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979 ⁽¹⁾	1970-79平均	1980(予測)
●実質GNP/GDP成長率(前年比)												
カナダ	2.5	6.9	6.1	7.5	3.6	1.2	5.4	2.4	3.4	2.9	4.2	0.25
日本	-0.3	3.0	5.7	5.5	-1.4	-1.3	5.9	5.3	4.4	2.3	2.9	-1
フランス	11.8	5.2	9.4	9.9	-0.3	0.2	4.9	2.8	3.3	3.4	4.0	2
西ドイツ	5.7	5.4	5.9	5.4	3.2	0.2	4.9	2.8	3.3	3.4	3.3	2
イタリア	5.9	3.4	3.6	4.9	0.3	-1.8	5.3	3.5	4.3	4.4	3.3	2
英国	5.0	1.6	3.1	6.9	4.2	4.7	5.9	2.0	2.6	4.5	4.1	3.5
合計	2.3	2.8	2.4	8.0	-1.5	-1.0	3.7	1.3	3.3	0.8	1.9	-2.25
OECD全体	3.1	3.8	5.6	6.3	-0.1	-0.5	5.4	4.0	4.2	3.4	3.4	
●失業率(前年比)												
カナダ	5.7	6.2	6.2	5.5	5.3	6.9	7.1	8.1	8.4	7.5	6.7	
日本	5.0	6.0	5.6	4.9	5.6	8.5	7.7	7.0	6.0	5.8	6.2	
フランス	1.2	1.2	1.4	1.3	1.4	1.9	2.0	2.0	2.2	2.1	1.7	
西ドイツ	0.6	0.7	0.9	1.0	2.2	4.1	4.1	3.9	3.8	3.4	2.5	
イタリア	5.4	5.4	6.3	6.3	5.3	5.8	6.6	7.1	7.2	7.8	6.3	
英国	2.2	2.9	3.2	2.3	2.1	3.4	5.1	5.5	5.5	5.3	3.8	
合計	3.1	3.6	3.7	3.3	3.6	5.4	5.4	5.3	5.0	5.1	4.4	
OECD全体	3.0	3.5	3.6	3.2	3.5	5.2	5.3	5.3	5.1	5.1	4.3	
●消費者物価指数(前年比)												
カナダ	3.3	2.9	4.8	7.6	10.9	10.8	7.5	8.0	8.9	9.1	7.4	
日本	5.9	4.2	3.3	6.2	11.0	9.1	5.7	6.5	7.7	11.3	7.1	
フランス	7.7	6.1	4.5	11.8	24.5	11.8	9.3	8.0	3.8	3.6	9.1	
西ドイツ	3.1	5.5	6.2	7.4	13.7	11.7	9.6	9.4	9.1	10.7	8.8	
イタリア	5.3	5.4	5.5	6.9	7.0	5.9	4.5	3.7	2.7	4.1	5.0	
英国	4.8	5.0	5.7	10.8	19.1	17.0	16.8	18.4	12.1	14.8	12.5	
合計	6.3	9.4	7.1	9.3	16.0	24.2	16.5	15.9	8.3	13.4	12.6	
OECD全体	5.6	5.0	4.4	7.6	13.3	10.9	7.9	8.0	7.0	10.5	8.0	
OECD全体	5.6	5.3	4.7	7.8	13.2	11.4	8.5	9.1	8.3	10.0	8.4	

(1)カナダと米国を除いて、OECDの推定

OECD Economic Outlook (1979年12月)

通してみると平均九・一パーセントと高い。

特に著しい伸びを示したのは、労働力と雇用であった。一九六九—七九年の間に、カナダの労働力は年平均三・二パーセントの割合で伸び続けた。これはOECD主要国のいずれをもはるかに上回る数字である。雇用の伸びの方は、年平均約三パーセントだった。それに対して、同時期の西独、イタリア、日本、英国などは、マイナスあるいはわずかの伸びにとどまっている。

カナダの失業率は、現在七パーセントを超える。人口増加率、労働力増加率の落着いた国から見ると、非常に高く思われるかもしれないが、カナダの場合、この背後には女性の労働参加と若年労働力の急増という特殊事情がある。したがって雇用の創出が高い水準で伸びたにもかかわらず、失業率の減少をもたらすまでには至らなかった。面白いことに、カナダの労働年齢人口全体のうち実際に雇用されている者の割合を示す「就業率」が、現在ほど高くなったことはこれまで一度もない。

強い輸出力

一九七九年に、カナダは四十億ドルという空前の貿易黒字を記録した。カナダは伝統的に対外貿易依存度の大きい国である。七九年の貿易総額（輸出入を合計したもの）は千二百五十億ドルをこえた。貿易総額だけでなく、国民一人当りの額でも、カナダは世界有数の貿易国で

主要先進諸国の経常収支(単位:10億米ドル)

	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978	1979
カナダ	1.1	0.4	0.4	0.1	-1.5	-4.7	3.9	3.9	4.6	4.2
日本	2.4	-1.4	5.7	7.1	4.9	18.5	4.6	-14.1	-13.9	-0.3
フランス	2.0	5.8	6.6	0.1	-4.7	-0.7	3.7	10.9	16.5	8.6
ドイツ	0.1	0.5	0.3	0.7	6.0	0.1	6.1	3.3	3.9	1.5
イタリア	0.9	0.8	0.8	4.6	9.9	3.5	3.4	4.2	8.8	1.1
英国	1.1	1.9	2.0	2.7	8.0	-0.8	-2.8	2.5	6.4	6.3
合 計	1.8	2.7	0.3	2.6	-8.6	-4.1	-1.5	0.5	2.0	5.5
その他のOECD諸国	9.4	10.7	3.9	5.7	-14.0	11.4	-2.6	-3.3	19.0	-11.9
OECD全体	-2.7	-0.9	4.1	4.3	-11.7	-11.8	-15.9	-21.7	-9.8	-15.5
OPEC	6.7	9.8	8.0	10.1	27.1	0.4	-18.2	-24.8	9.1	-27.4
OPEC	-0.5	0.3	1.3	7.7	59.5	27.3	36.5	29.0	7.0	65.0
非産油諸国	-8.1	-9.8	-5.2	-6.0	-23.5	-37.5	-25.5	-24.0	-36.0	-47.0

OECD Economic Outlook (1979年12月)

ある。

カナダは、一大輸入国でもある。特に資本財については、他の先進諸国とくらべて異常なほど輸入依存度が高い。産業機械設備ではおそらく世界最大の輸入国だろう。企業の資本構成のうち、機械設備分の約五分の三は輸入品である。

最大の貿易相手国は米国で、輸出入を合計したカナダの商品貿易総額の七割を占める。工業製品だけの割合は、さらに大きい。

一方、カナダと日本との直接貿易は、きわめて重要ではあるが、全体に占める比率は米国に比べてずっと落ちる。日本への輸出はカナダの商品輸出額全体のざつと六パーセント、輸入に関してはこれよりさらにいくらか低くなる。一九七九

年の対日輸出は四十億ドルをこえたが、日本の対加輸出は円高のため若干の落ち込みを見た。その結果、カナダの対日貿易収支は、十八億ドルという大幅な黒字を記録することになった。例年の日加貿易は歴史的にカナダ側の出超ではあるものの、これよりずっと均衡のとれた状態にある。

ところでカナダは、過去十九年のうちわずか一年を除いて、すべて商品貿易で黒字を記録してきた。だが他方、経常収支については常に赤字であった。これは三年を除いて常に赤字であった。これは主にサービス部門(つまり商品取引以外の)の赤字によるものである。昨年度の経常収支の赤字は、GNPの一・九パーセント、実に五十億ドルにも達している。中でも最大の赤字急増要因は、国外居住者に支払われる配当金である。カナダの対外負債の累積総額は、今や七百億ドル近くにもなっている。

一九八〇年の見通し

OECD主要国の大半がそうであるように、現在カナダは経済停滞期に入りつつある。今年の実質成長率はゼロないしゼロに近いものと予測されている。したがって失業率の増加が見込まれると同時に、政府見通しによるインフレ率は約二〇パーセントとされている。だが企業の投資意欲は依然として衰えず、高水準に推移するものと見られる。昨年度の企業投資(住宅建設を除く)は、実質九・四パーセント増大したし、今年も昨年

に五・七パーセント伸びるだろう。現在カナダ経済の中で特に弱いのは、大きな生産転換期にある自動車部門と、高金利のためにスローダウンしている住宅部門である。インフレに対処するため、財政および金融上の抑制措置が講じられるのはほぼ間違いない。賃金上昇率はこのところ、インフレ率を下回っている。

個人の貯蓄意欲は依然として旺盛で、貯蓄率は約一〇パーセントを維持している。

八〇年代全体の見通し

カナダの潜在成長力は、当面の短期的見通しが比較的思わしくないにもかかわらず、きわめて有望なものがある。

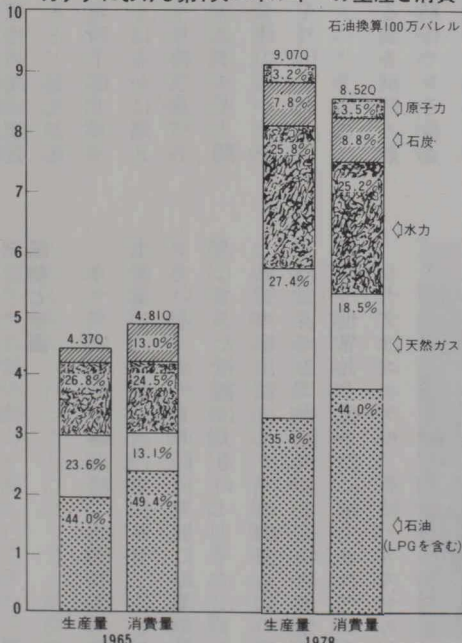
エネルギー需給のバランスから見ると、カナダは世界の主要先進工業諸国の中で最も望ましい状態にある国といえることができよう。昨年は各種エネルギー全体(原油、天然ガス、電力、石炭、ウラン等)の貿易黒字が三十六億ドルに達した。天然ガス、電力、石炭、ウランについては、カナダは現在純輸出国である(あるいは純輸出国となる状況にある)にもかかわらず、原油については、カナダは純輸入国であり、その赤字額は七九年には二十億ドルにのぼっている。政府は一九九〇年代には原油の自給を達成した

いとしている。これは可能性はあるが、そのためには、国民が石油から他のエネルギーへ消費の転換を行なう必要があると同時に、今後ますますコストのかかる国内石油資源の開発に膨大な投資をしなければならぬ。

また、カナダのエネルギー価格を次第に国際水準にまで引き上げ、米国内価格より若干低い程度に置くことも、現在の政策目標の一つである。ただし天然ガスに関しては、消費者の使用促進をはかる奨励措置として、国内石油価格よりかなり低い所にとどめられることになろう。

八〇年代におけるカナダの経済可能性は、エネルギーのほかにいくつかの有力な資源が存在することによって、一層期待できるものとなる。まず第一に、カナダは食糧、特に小麦などの穀物を中心とする農産物の一大輸出国である。漁業についても、専管水域の拡大がカナダ漁業に有利に働き、カナダは世界一の水産物輸出国となった。そのほか林産品、各

カナダにおける第1次エネルギーの生産と消費



資料: エネルギー・鉱山・資源省発行
and Gas Supply/Demand Overview (1979年11月)

産業別生産高の変化(1960-1979)

	1979年の 寄与率	1960-1969	1970-1979	1979
農業	2.8	2.1	2.5	-1.1
農業以外の第1次産業	4.0	4.7	2.6	6.3
製造業	22.5	6.4	3.7	3.3
建設業	6.2	4.0	2.9	2.0
生産部門の合計	35.4	5.4	3.3	2.9
運輸、倉庫、通信、公益事業	13.3	6.5	6.0	6.5
貿易	11.9	5.0	4.6	1.9
金融、保険、不動産業	13.2	4.7	5.4	3.4
コミュニティ、企業、個人サービス	19.4	6.3	4.2	3.2
行政	6.8	2.6	3.3	-1.3
サービス部門の合計	64.6	5.1	4.8	3.2
総計	100.0	5.3	4.2	3.2

Statistics Canada, Indexes of Real Domestic Product by Industry

産業別雇用率の変化(1960-1979)

	1979年の 寄与率	1960-1969	1971-1979 ¹⁾	1979
農業	4.7	3.0	0.7	2.1
農業以外の第1次産業	2.6	0.8	2.6	5.8
製造業	20.0	2.3	1.8	5.9
建設業	6.2	1.5	3.6	1.4
生産部門の合計	33.4	0.9	1.8	4.5
運輸、倉庫、通信、公益事業	8.7	1.8	2.8	4.8
貿易	17.4	2.6	3.5	3.9
金融、保険、不動産業	5.3	4.9	4.3	1.5
コミュニティ、企業、個人サービス	28.4	6.5	4.2	4.8
行政	6.8	3.8	3.7	0.1
サービス部門の合計	66.6	4.1	3.8	3.8
総計	100.0	2.7	3.0	4.0

Statistics Canada, The Labour Force

種鉱物も、国内需要をまかない、余分を輸出に回している。

主要国の通貨に対して、最近のカナダドルは安値傾向にある。この結果、カナダ製品の国際競争力は強化された。カナダは現在でも製品貿易ではかなりの赤字を余儀なくされているが、それでも食糧以外の最終製品(完成品)の輸出高は、一九七一年から七九年の間に倍増した。同期間中の半製品輸出の伸びは約四割増、原材料の輸出高は若干の減少を示した。これはカナダ製品の競争性の高さを示すもので、今後のプラス要因である。

カナダは、従来、高賃金国といわれてきたが製造業の現場労働者の賃金で見ると、米ドルで計算したカナダの賃金水準は決して高くない。スウェーデン、西ドイツ、オランダ、ベルギー、ノルウェー、スイスなどといった欧州諸国は、製造業

労働者に対して、一時間当たりカナダの四割以上も払っているのである。これまで指摘されてきたカナダと日本との製造部門における大幅な賃金格差も、今ではかなり縮小されている。

カナダにおける中・長期の一般投資動向は、総じて非常に明かるい。大方の経済専門家の判断によると、今後最終需要の持続的増大を実現できるかどうかは、ひとえに投資如何にかかっているという。まず考えられるのはパイプラインや合成原油精製工場の建設、発電能力の拡大といったエネルギー関連の大型投資だが、これは鉱業あるいは林業一般のそれよりかなり高い率でふえるものと思われる。もう一つ大きな投資促進要因として、製造部門をあげることができる。これは自動車産業が、将来に向けて燃費効率の高い小型車を開発するため、多額の投資をするだろうからである。また、近い将来、労働力増加がかなり緩やかなペースに落ちるため、それをカバーする上で生産性向上が不可欠となり、そのための投資もかなり多額に必要となる。

ここに、一九七九—九〇年の投資必要総額に関する一つの予測がある。カナダ投資機関協会が最近

広範囲に利用している信頼性の高い調査報告書である。それによると、七九—九〇年の投資必要総額は一兆四千億ドル、年平均にして一千億ドルをはるかに超える額になるといふ。このうち約二八パーセント、四千六十億ドルがエネルギー関係の投資である。また、全体の六パーセント(八百六十億ドル)を外国からの投資と見込んでいる。

別の、やはり信頼できる調査機関の最近の調査によると、今後期待できる投資規模一千万ドル以上の大型プロジェクトとしておよそ七十五件をあげている。総額では一千億—一千二百億ドルになる勘定である。

また、ある有力な経済観測筋の見解からしても、八〇年代はほぼ毎年、企業の実質投資が推定経済成長率の三・七パーセントをかなりの程度上回ることになりそうである。

資源産業と資源加工産業

カナダは、世界に類を見ないほど豊かつ多様な資源に恵まれている。鉱物・森林・農業資源はカナダの輸出に大きく貢献しているし、カナダに国際競争力のある高度な製造業が発達しえたのも、ひとつにはこれらの資源のおかげである。激しい競争下にある現在の世界市場において、こうした強力な資源の存在がカナダをきわめて有利な立場においている。

鉱物と金属

カナダは鉱物の輸出額では世界第一位、生産量では米ソに次いで世界第三位となっている。カナダの経済発展に鉱業が果たしてきた役割は大きい。

鉱物の輸出額はカナダの輸出全体の約二割を占める。生産される鉱物の半分以上が、世界九十数か国に輸出されている。カナダはニッケル、亜鉛、アスベスト



ケベックのアスベスト採掘現場

の生産では世界一、金、ウラン、モリブデン、チタン、石こう、塩化カリ、銀、硫黄、コバルト、ブラチナメタル、鉛では世界第二ないし三位であるほか、アルミニウム、鉄鉱石、マグネシウム、銅その他数種の鉱物でも世界の上位生産国に入る。

したがって、カナダを本拠とする、世界的に有名な多国籍金属企業がいくつかあったとしても、少しも不思議はない。たとえば、日本にも投資先をもつINCO、アルキャン、コミンコなどがその一

アルバータ州の
石油精製工場群。



例だ。しかし他の産業もそうだが、カナダの鉱山・精錬業はかなりの部分(六割)が外国企業の支配下にある。とくに鉱山部門は、精錬部門より外資の占める割合がはるかに大きい。

鉱物資源は再生できない資源であるか

ら、国内産鉱物を基礎とした大規模な加工工業および製造業の育成に重点を置くことによって自国の優位を高めていこう、というのが、カナダの方針である。成熟した産業経済と進んだ技術ノウハウを背景に、鉱産物を輸出する前にできるだけ加工するための産業開発に重点が置かれている。

昨年、鉱山部門も鉱物加工部門も

営業収入および純益の点で、七〇年代のうちでも上々の業績を示した。七九年の生産高は二百六十億ドルと、これまでの最高を記録した。

金属・鉱物部門(とくに金属)の最大の貿易相手国は依然として米国である。

しかし、日本とカナダとの関係も近年はとくに緊密化の度を増してきた。一九七九年における金属・鉱物の対日輸出高は十五億ドルをこえ、同部門の輸出額全体の四割以上を占めた。鉱石および精鉱の比重が大きかった。カナダではエネルギー

ギー・コストが安いため、金属に関するカナダの国際競争力が今後とも大きく伸びることははっきりしている。事実、ここ数年、アルミや鉄合金といったエネルギー多消費型の金属について、日本の輸入は急速にふえてきている。

森林資源

いくらでも再生可能な資源である木材に恵まれたカナダは、世界有数の林産物輸出国である。カナダ国内にある一億七千七百万ヘクタールの商業林は、世界の商業林の八パーセントに相当する。一九七九年における新聞用紙、材木、パルプ、バルブ材およびその他の林産品の輸出高は、総額百十八億ドルで、国内生産高の七割にも及んだ。カナダの森林面積は陸地全体の三五パーセントを占め、そこから昨年は一億五千万立方メートルの材木が伐り出された。

林産物は、昔から重要な対日輸出品目である。日本の輸入は年々増え続け、一



海外に輸出される材木

九七九年には九億ドルに上った。急激な

増加を示している一例に、建築用角材がある。その一部は、最近カナダの建築技術として日本に導入され好評を得ている。ツバイフォー工法で使用されている。

水産資源

カナダの水産資源は、五百年以上も前から豊かな漁場を提供してきた。カナダには、二十四万キロメートルの長い海岸線に加えて、七十五万平方キロという世界最大の内陸淡水域が存在する。東西両岸に広



がる大陸棚は、適度に浅く豊かな餌場となり、また適度に低い水温が身の締まった味の良い魚を育てる。タラ、サケ、ニシン、イカ、ロブスター、サバといったよく知られたものや、そのほかの市場価値の高い魚がとれる。

カナダは、現在世界最大の水産物輸出国である。毎年ほぼ五十万トン、価格にして十四億ドルの魚が輸出される。そのうち五割は米国向けだ。米国民の口に入る魚の一五パーセント強がカナダ産である。

一九七七年一月一日、カナダは漁業資源保護管理のため、二百カイリ制に踏みきった。それに伴い、日本を含む諸外国

との間に、領海内では漁獲可能量の範囲内で操業を許可するという内容の二国間協定を結んだ。国民一人当りの魚の消費量が世界一である日本は、数の子、サケ、イカを始めとする各種カナダ産水産物の、ますます重要な市場となってきた。

農業

カナダの水産資源は、八〇年代の最も有望な産業のひとつになるといわれている。とくに従来比較的成長の遅れていた地方では、水産物加工業の発展に大きな期待をかけている所が多い。

カナダの重要な産業である農業は、高度に専門化され、最新技術を駆使し、生産性も高い。西側先進工業国の中でも、カナダのエンゲル係数は最低といっている。また、食料品が安いことを示している。また、カナダ農業の強さは、農産物貿易が毎年大幅な黒字を記録していることから明らか。昨七九年の黒字幅は二十億ドルだった。

カナダの耕地面積は、約六千八百万ヘクタール。そのうち約四分の三がマニトバ、サスカチュワン、アルバータのいわゆる平原三州で占めている。カナダは数々の温帯産の農作物を輸出し、熱帯産のものも輸入している。各種穀類において特に強く、小麦の輸出では世界の五指に入る。酪農品、鶏卵、チキン、七面鳥、タバコも十分自給できる。



械力の導入により、農場面積がふえ、農家戸数は逆に減少した。高度な農業機械の導入、品種改良、効き目の大きい肥料や農薬の使用などによって、農業は大きく変質した。一九四九―七四年の四半世紀間に、農民一人当りの実質生産量は、実に三倍にも伸びている。

カナダ農業のもつ競争力を考えれば、食品・飲料の加工業が、生産高からいっても従業者数からいっても製造業の中でも最大の分野であることは容易に理解できよう。食品加工部門の企業数は四千社をこえ、そこに約二十二万二千人が働いている。そして国内の食料需要の九割近くを自給して生産量の一一パーセント（一九七七年）を輸出に回している。

日本は、カナダ農産物の最大の輸出先である。七九年の輸出額は、十億ドル以上にのぼった。対日輸出品の主たるところは、小麦、大麦、アマ種子、種子、豚肉、モルト、飼料、冷凍野菜、ウイスキーなどである。

鉱物、森林、漁業、農業の各資源およ

び資源加工においてカナダがもつ有利な条件と実力は、今後のカナダ経済および輸出の拡大発展を支える確固とした基盤を与えてくれる。さらに、競争力が一層強まっているエネルギー部門と相まって、これらの分野における強みにより、カナダは八〇年代に大きく発展する有望株となっている。

カナダの製造業

際立って有望な資源産業を目の前にしている、カナダには競争力も成長力もある強力な製造業が発達している事実を、われわれはつい見落としてしまう。カナダの製造業は、一九七七年時点で国内総生産（GDP）の二一パーセントを占めた。これは農業、漁業、林業、建設、鉱業を全部合わせた数字よりずっと大きい。日本の製造業は、同じく七七年時点でGDPの二九パーセントだった。

製造業の歴史

カナダには早くから国際競争力の強い製造分野（とくに資源関係）が一部に発達していたが、第二次世界大戦以前は、主として国内市場ならびに特惠関係にあった英連邦諸国を対象とした生産活動が多かった。カナダ連邦が成立して十三年後の一八七九年に、カナダ政府は、製造業の育成を主眼とした「ナショナル・ポリ

シー」と呼ばれる産業戦略を採用した。これは当時、イギリス以外の多くの貿易国で行なわれていた高関税政策と基本的に同じものである。この保護貿易政策は、経済全般の発展を助成する一手段として大陸横断鉄道建設と並行して進められた。

カナダに生産財製造部門を発展させる最初の動因となったのは、今世紀最初の十年間に起こった移民の急増と西部の小麦経済の開幕、そして鉄道網の急速な発達である。その後、一九二〇年代後半に再び急激な拡大を示したあと、続く三〇年代の世界的な不況下で保護貿易主義の時代を迎え、これを切り抜けるために英連邦諸国との特惠関税協定が結ばれた。

初期の頃の製造業は、大半が外国の技術と資本に依存していた。これはカナダの保護関税を利用するために、外国企業が支社をカナダにつくる場合が多かったからである。最初はカナダ市場あるいはカナダの地方市場を対象に生産が開始され、やがて英連邦の特惠制導入とともに、域内諸国への輸出機会を利用する意図で、カナダにさかんに外資系の工場が建てられていった。

第二次大戦以後、カナダの製造業は劇的な変化を遂げた。経済の高度成長が長く続いた一九四〇年代後半から五〇年代にかけて、製造業も高度の成長を達成した。なかでもとくに特徴的だったのは、貿易自由化の進展と国内市場の拡大に対応した、カナダ製造業の国際競争力の強化である。

今日のカナダ製造業

製造業は、今やカナダにおける商品生産高全体の半分以上を占め、カナダ経済随一の商品生産部門となっている。農業その他の一次産業は、製造業にくらべるとその比重が低下しつつある。

国際間の相次ぐ関税引下げは、貿易量の拡大と各国間の分業化を促進させる道を開いた。たとえば現在、カナダの対米輸出の七割は関税がかからない。今後、東京ラウンドで合意した関税引下げが完全実施されるようになれば、この数字は八割近くまで上がるはずだ。そのほか、加米自動車協定や防衛製品分担協定などの特別協定も、自由貿易にのっとった加米間の貿易拡大に、重要な役割を果たしている。



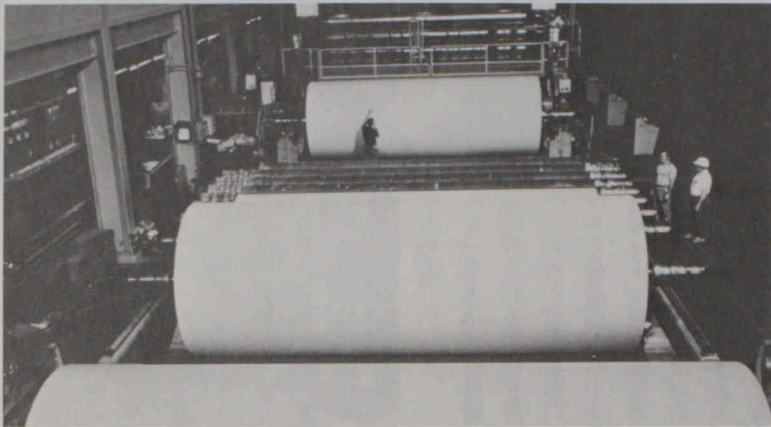
オンタリオ州の自動車部品工場

ている。

カナダの産業が高度に国際分業化して

いるのは、工業製品に対する国内需要の約三パーセントを輸入に頼る一方、国内工業生産の約三〇パーセントを製品輸出している事実が反映されている。したがって、製紙などの部門では大幅な赤字となり、機械その他の資本財では大幅な赤字が出るというアンバランスは残るにせよ、カナダにおける製造部門の生産量は、実質的に同部門に対する国内需要量とはほぼ等しくなっているわけである。

製品輸出の中では、組立品と完成品の占める割合が伸び続けている。この両者で、一九六〇年にはカナダの輸出全体の六〇パーセントを占めたが、七八年にはこれが七三パーセントに増加した。とく



ケベックの製紙工場

に完成品の輸出増が大きく、六〇年の八パーセントから七八年には三六パーセントへと大幅に伸びている。

二次大戦後における生産性の伸びも著しく、米国の伸びをはるかに上回っている。人時（マンアワー）当りのカナダの生産量は、一九四六年以降現在まで、年平均四・一パーセントの伸びを示した。それに対し、同期間における米国製造業の生産性の伸びは、二・七パーセントにすぎない。その結果、米加間で指摘されていた製造業における生産性のギャップは、かなり埋められることになった。これはとくに耐久財の場合に著しい。

製造部門の主要業種は、ほとんどがカナダ特有の経済環境や地理的条件から生まれたものである。たとえばカナダの得意とする運輸通信機器は、広大な国には不可欠のものであったし、林業や鉱業あるいは石油産業に使われる加工処理機器の製造能力は、資源開発の進行と並行して発達してきた。同様に石油化学、非鉄金属、農産物などをベースとする二次産業の発展も、豊富な原材料の存在を考えると当然のことといえるだろう。

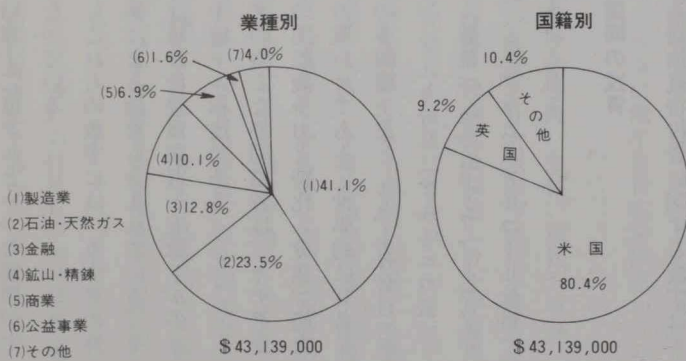
カナダの実質国民生産に占める製造業の割合は、八〇年代中に二・五—三・〇パーセントふえるものと予測されている。これはとくにカナダ製造業の国際競争力向上にもとづいて出された数字である。製造業のなかで平均以上の成長が見込める業種としては、運輸機器、電気製品、化学品、金属加工、一次金属、機械などがあげられる。

外国直接投資 と対外投資

カナダは、世界中のどの国よりも多額の外国資本を受け入れている。これはカナダが昔から外資に対し開放的な態度をとってきたこと、また為替管理がなく、カナダ経済の実績からして非常に魅力ある投資先となっていることなどの理由によるものである。最近の統計によると、カナダ製造業の五六パーセントが非居住者の支配下にある。

しかしその反面、カナダ自身が有力な海外投資者であることは意外に知られて

カナダにおける外国直接投資(1976年)



いない。カナダ企業の実力と国際競争力はすでに高い水準に達し、これが積極的に海外へ進出する傾向を作っている。

カナダにおける外国直接投資の公式統計は、一九八〇年五月に統計庁が発表したのが一番新しい。対象は一九七六年であるが、これは諸外国と異なり、カナダには外国為替管理制度がないので、正確な数字を集計するにはこのようなタイムラグを余儀なくされるという事情による。

この統計によると、七六年末の外国直接投資残高は帳簿額で四百三十一億ドル。外国直接投資とは、カナダ企業に対する外国投資で、その規模あるいは性格からして、外国投資家が経営を左右しない支配する潜在的可能性をもつ場合をいう。

国別に見ると、米国が圧倒的な差で一位を占め、投資総額三百四十七億ドル、カナダの外国直接投資全体の八〇・四パーセントの実績をもつ。二位が三十九億ドル、全体の九・二パーセントのイギリス。三位が七億四千六百万ドルのオランダ、すぐ続いて七億四千二百万ドルのフランス。その後に西ドイツ（六億一千万ドル）、スイス（五億八千六百万ドル）、ベルギー／ルクセンブルグ（五億八百万ドル）、そして八位に日本（二億九千三百万ドル）がくる。

外資が集中しているのは製造部門で、外国直接投資全体の四一・一パーセントを占める。そのほか石油・天然ガス（二・三・五％）、金融（二・一・八％）、鉱山・精錬（一〇・一％）も外資の集中する部

事業移民 に優遇策

カナダ政府は、カナダで投資する企業家や自営業者の進出を求めている。

カナダには企業として成功するために必要な経済規模、市場、労働力、天然資源が備わっているほか、カナダ政府は企業の大小にかかわらず、事業の設立・拡大のために有利な優遇策を講じている。また、カナダに移住してから事業を始めたり、または既有企業の買収を希望する外国の企業や自営業者に対して、できるだけ援助を措きまない方針である。

カナダに進出する場合、企業については五人以上、自営業者については最高五人の従業員を雇用できるだけの資金を持ち、もしくはカナダの経済発展や文化・芸術に寄与する、というのが条件になっている。特に、カナダに住み、事業経営に直接携わる企業家を歓迎している。



投資希望者に対しては、駐日カナダ大使館の査証部（東京都港区赤坂八丁目五十二番五、電話四〇三一九一七六八）で事業計画について相談に応じており、また次のことさらにについてカナダの事情を説明している。

- 全般的な経済状況やビジネス環境。
 - 市場の状況、政府による優遇措置、必要とする労働力の有無、賃貸料と必要経費に関する参考資料のほか、カナダ各地における事業の可能性。
 - 法人設立、税金、関税、労働法規、新案特許、商標、工業意匠など、カナダで事業を営むための国と州レベルの必要事項。
 - 銀行サービス、融資、交通、通信や技術の有無。
 - カナダにおける生活事情および移住のための必要事項。
- また事前調査のためカナダを訪問する必要ができた場合、査証部ではカナダの政府関係者に対し、事業設立に適した立地条件や資金的・人的条件について詳しい情報を提供してくれるよう手配する。
- 次の段階は、事業企画書を作成し、査証部に提出することである。企画書には、以下の事項を盛り込む。
- どういう製品を販売し、どういうサービスを提供しようとしているのかなど、事業計画の詳しい内容。
 - 資金源に関する説明。
 - 資金の流れについての見通し。
 - 従業員の予定数。
 - 従業員の職種。



この計画案はカナダへ送られ、連邦および当該する州政府の関係当局によって評価、検討される。その間に、カナダ移住に必要な身体検査などの手続きを済ませることもできる。

大使館査証部では、希望者のために次のような事項に関する資料を用意している。

- カナダの地理、気候、国民、言語、政治制度、社会保障、住宅事情および医療・健康保険制度（カナダ雇用移民委員会提供による）。
- 全般的なビジネス環境、税制、労働法規、特許、企業組織の形態、関税および企業・産業界に対する政府の優遇策（カナダ通産省提供による）。
- 貸付け、貸付け保証、資金調達などの融資サービスおよび経営相談と研修（カナダ連邦事業開発銀行提供による）。
- カナダ各地におけるビジネス環境（各州政府提供による）。

グレイ通産大臣が日本に要請 自動車工場進出と 部品購入の拡大

自動車貿易を中心に、日加間の通商問題を協議するため、八月上旬、カナダからグレイ通産大臣が来日した。

同大臣は一週間の滞在中、田中通産、渡辺大蔵、伊東外務、亀岡農林水産の各大臣、大来対外経済担当政府代表、牛場外務省顧問らと会談したほか、日本自動車工業会、日産自動車、富士重工、トヨタ自動車、鈴木自動車、日立製作所、本田技研、日本自動車部品工業会、自動車総連などを訪問した。

これらの会談で、グレイ大臣は、米加自動車協定によりカナダとアメリカの自動車産業が一体であることを強調するとともに、米国政府が何らかの対日輸入規制策を打ち出せば、カナダも同様の措置をとる、と示唆した。

カナダの対日自動車貿易は日本からカナダへの輸出約五億七千万ドルに対し、カナダから日本向けの輸出はわずか六百万ドルと、日本側の大幅赤字。

同大臣は、日本の自動車業界がこうした事情を考慮して、カナダに生産工場を設置し、また輸出車にカナダ製部品をもっと使用するよう、前向きな検討を訴えた。日本側から積極的に検討するとの表明があったという。

トルドー首相に次ぐナンバー・ツード、
「有能なエコノミスト」として定評のある
マケツカン蔵相がまだ新予算を組めな
いでいる。「今秋にも新予算を発表する」
と語っているが、先の総選挙が進歩保守
党政権の予算案不信任に端を發し、しか
も経済問題は依然カナダ国民の最大関心
事であるのに、ゆつたりした話だとの評
もある。が、トロントのある銀行首脳は
「財政の現実是谁もお手上げ。総選挙
時の公約は盛り込めない状況。実際には
新政府のすべり出しにケチがつかないよ
うに慎重になっているのではないか」と
語る。

カナダ経済は慢性化した「三大病」を
抱えているといわれて久しい。財政はこ
ともし膨張し、百四十億カナダドル程度
の赤字になる見通し。カナダ大蔵省のあ
る担当官は「思いきって荒療治を施さな
いと、的確な経済政策が打てなくなる」
と率直に記者に悩みを打ち明けた。その
意味では、不信任にこそなったが、先の
「クロズビー（前蔵相）予算」は今なお
政府部内や経済界で評価が高い。増税は
もはや先進各国共通の問題になっており、
さらに「エネルギー新税」を打ち出して
歳入欠陥を打開しようとした努力が経済
の分かる人達の共感を得ているようだ。
失業者は九十九万人台とひと頃の「百
万人の大台」を割ってはいるが、八パー
セントと高水準。特に若年層の就職難が
社会問題化する恐れが強い。国際通貨も
対米レート八十六セント台と低迷したま
まの状態であり、輸出とのからみもある

が、一向に回復しそうにない。これに、
この秋からインフレ問題が加わりそうに
見通した。政府見直しによると、消費者
物価上昇率は一〇パーセントと見ている
が、この線を超えるようなことがあれば
インフレ問題は大きな課題として再浮上
しよう。

カナダ経済はこう見るといかにも重症

カナダ特派員日記①

米国がクシャミを しても……

橋田 忠明

に映るが、産業界は好調である。昨年の
企業収益は対前年比四〇・六パーセント
と記録的な伸びを示したし、設備投資も
名目で一二・六パーセントと二ヶ台を
達成した。貿易収支も四十一億カナダド
ルと予想以上の黒字幅だった。特に、カ
ナダ産業界主力の資源関連の業種が活況
を呈しているのが目立つ。
たとえば、カナディアン・インペリア

ル・バンク・オブ・コマースのハリソン
会長はこう見る。「米国景気の後退が以
前ほど直撃しなくなった。産業界の好調
は当分の間続くだろう。経営者連は八〇
年代の競争を有利に展開するため、布石
固めに必死だ」と。事実、強気の経営者
マインドが顕著である。TOB（株式公
開買い付け）の話題が証券市場では絶え
ないし、最近では米国企業に果敢に乗っ取
りをかける企業すら現われ始めている。
三十才代で巨大企業グループを率いる「売
り出し中」のC・ブラック会長も、「英
国型の紳士的な経営風土が変わりつつあ
る。世代交代が進むとともに、カナダ企
業にもドライで能動的な行動が普及しよ
う」と「経営革新」を説いている。

紙の「カナダ企業ランキング」でも、ベ
スト・テンのうち七社が外資系である。
米国企業の子会社がお産業界をリード
している。カナダ政府や州政府が長年企
業のカナダ化を進めてきているが、戦後
三十五年、ようやく規模は中小ながらカ
ナダ企業が層を厚くしてきている点が、
こうした「脱米国化」を少しずつ促進し
ているように見える。

カナダ経済が悪化したと喧伝されたの
は現実にはビジネスの沈滞にあった。そ
れが、驚くほどの回復振りを示している
のだが、その背景には、値上げ政策の浸
透、輸出の好調、物品税の引下げなど需
要喚起策の奏功がある。カナダの「資源
基地」と称されるアルバータ州では石油
・天然ガスの開発ブームである。ノランタ
・マインズ社のパウイス会長は「カナダ
企業は実力をつけてきており、この一、
二年間の経済運営が外資支配型のカナダ
産業界の体質を変えていく重要なカギに
なる」と片目をつぶって見せた。
ここで注目すべきなのは、米国の景気
不振に対するカナダの抵抗力の向上であ
る。かつては「米国がクシャミをすれば、
カナダは風邪を引く」と評された。この
ほど発表されたファイナンシャル・ポスト

カナダ経済はマクロとミクロのギャッ
プが鮮明になっており、この傾向は続く
とみられる。ことしのGNP（実質）伸
び率は「横ばいか一パーセント増程度」
との見方が一般的である。このミクロと
マクロの格差を縮小することが来年に向
けての課題である。したがって、経済、
産業政策が以前にも増して重味を持つて
こよう。

ごく最近、カナダ商工会議所のヒュー
ズ専務理事と話していたら、「政府がも
う少し民間企業の意見を吸収すべきだ」
と言う。この二、三年間、経済閣僚と定
例会議を持ち、産業界の実情について話
し合ってきたという。「だが、米国や日
本と違い、産官協力が進みにくい実
情がある。経営者は政府というそれだ
けで反発する気風があるし、政府は産業
政策よりも広範な問題を重点にしがちだ
からだ」と同氏は嘆いていた。経営者の
自己努力マインドは健全ではある。しか
し、八〇年代の長期路線を固めるには、
政策誘導がどうしても欠かせないだろう。

（日本経済新聞社トロント支局長）

鍋田さんのこと

埼玉県草加市 ● 橋 明美

私とカナタとの出会いは、少女期のロマンチックな幻想の中にあつた。ルーシ・モングメリーの「赤毛のアシ」を通して、カナタという国が初めて認識されたのである。ちょうど中学生の頃であつた。ガーテン・アランドと呼ばれる、プリンス・エドワード島の美しい自然描写が、今でもすぐ頭の中によみがえつてくる。アーク・トウエイやミッチェル、オルコットなどの描く、アメリカ合衆国とはなんとなく色あいのちがうカナタという国に興味をひかれたのである。高校に入つて、授業で習つたカナタは、地理的側面が重視され（たとえば、気候は冷帯で、農業は小麦生産、地下資源が豊富で面積の割に人口は少ない、など）、歴史ではカナタはほとんどといてよいほど出てこなかつた。というわけで、私のカナタに対するイメージは、相変わらず「森と湖の国」でしかなかつた。

四月のある暖かな日、鍋田さん御夫妻が、暮参りのためにカナタから帰国されていられた。私を知つた。たまたま、私の母が、鍋田さんの奥様の妹さんを知つていたという関係で、ともかくも、カナタのお話ならなんでもいから聞きたかつた私は、渡りに船とばかり、おしかけたわけである。ひばりの鳴く麦畑の前にした縁側で、鍋田さんは、六十六、七才であらうか、若々しいシャツを着て、背が高かつた。鍋田さんはカナタを「ギヤナダ」と発音した。ああカナタは「ギヤナダ」なんだ、という妙なおどろきが私にあつた。「ギヤナタではね、小川へつりに行く」と、タツクがそばによつてくるんですよ、ちょっと郊外に行けばすぐ大自然がありますからね」とか「私のボートたちはみんな夏休みにアルバートをして、一人はアフリカを旅行し、もう一人のボートは、トロント大学の法学部を卒業したあとまた医学部に入り直しましてね——」とこんなことを話されたのを覚えている。その時、私は、実はカナタ史、特にマクケンジー・キングに興味をもっているが、マクケンジー・キングについて御存知のことがあれば、お話しいただきたいと、鍋田さんにお願ひした。鍋田さんは、「瞬言葉をつまらせ、あまり多くを語らねなかつた。そのことを、私は別に気にしなかつた。今、鍋田さんからいらしたいた航空便を読み返しながら、六年前の初めでの出合いを思い出している。あれは私が大学二年の春休みのことであつた。

また太平洋戦争に突入した一九四一年のアリイッシュ・コロンビアからの日系移民の強制移住。その当時の首相が、マクケンジー・キングではないか。鍋田さんはその時、このことについて何も言われなかつたが、その当時の御苦勞を思い出されていたにちがいないのである。一応いろいろなことを、おうかがひしたあとで、鍋田さんは「では、お互いの住所をメモして、また何かあつたら連絡下さい。私の方もカナタに帰つてから本など調べてみましょう」と言われ、せつなくたすねてこられたのだからと、カナダのアイコンとアリイッシュ・コロンビアとオンタリオの地図を私にゆすつて下さつた。春休みあけの大学生活にもどつて、一か月半くらいたった頃であらうか、私はカナタから小包を受けとつた。鍋田さんがマクケンジー・キングの伝記と、カナダ史の概説書を送つて下さつたのである。一緒に入つていたお手紙には、「向學心に燃える日本の若い人のお役に立つのが、老後をくらししている私たちの役目であり、また何かお役に立てることがありましたらいつでも御連絡下さい」というような意味のことが書かれてあつた。私は感激した。正直言って、確かに住所をお知らせはしたが、まさか、ちやんと送つて下さるとはとても信じられなかつたのである。それ以後、大学を卒業するまでの二年、余り、鍋田さんの御好意に甘えて、三度資料を送つていただいた。マクケンジー・キングの著書を図書館で借り出し

て、そのコピー四百ページを三回に分けて航空便で送って下さったこともある。

確かその時、私は、お礼をかねて、三十三ドルばかりの為替と、歴史小説がお好きかどうか聞いていたので、「元禄太平記」を送ったことを覚えていた。めんどうなお願いをしたにもかかわらず、そのつど送って下さった御親切に私は心から感謝した。おまけに、自分ではあまり手紙をお書きにならず、ほとんど奥様に書いてもらおうという鍋田さんが、私には必ず自筆で返事を下さるのである。そんな事情を知って、私は、現在の日本で失われようとしている暖かい人間性を、はるかカナダにおられる鍋田さんの中に見出したのである。

ともかくも、鍋田さんに迷惑をかけながらも、私自身は神田の古本屋をあさりつつ卒論を完成し、大学を卒業した。

その後教職につき、やがて結婚し現在に至っているが、その間ずっと鍋田さんとの文通は続いていた。ライラックの花の下、広い自宅の庭で写された写真を送って下さったのもその頃であった。大学卒業のお祝いにとメダルを、結婚のお祝いにとトロントの写真集を送って下さったことも、昨日のように思い出される。そして去年（一九七八）の九月九日、奥様からの手紙で、八月六日に鍋田さんが亡くなられたことを知ったのである。

「朝には紅顔ありて、夕には白骨となる身なり、すでに無常の風来たりぬれば、すなわち二つの眼、たちまちに閉じ、一つの息長く絶えぬれば、紅顔むなしく

変じて桃李のよそをいを失いぬる時は、六親眷属集まりて、なげき悲しめども、更にその甲斐あるべからず、さてしもあるべきことならばとて、野外に送りて夜の半の煙となし果て見れば、ただ白骨のみぞ残れり。」奥様からいただいた手紙には

私の心の中のカナダ

栃木県宇都宮市・片岡法子

私が初めてカナダという国に魅せられたのは、あのモンゴメリの「赤毛のアン」を読んでからである。どうしてもプリンス・エドワード島に行つて、その美しい四季によって変わる草や花や木々を見たいと思つた。輝く湖、恋人の小径、お化けの森に行き、そしてミス・アン・シャリーのように想像しなくてはならなくなつたのである。現実の中でコンプレックスを感じたり、苦しんだりしている私を、人は逃避というけれど、想像することによって紛らわし、そうすることによって新たな希望を見出して行く——そういう私を想像の世界へ導き、希望を与えてくれる。

さらに私にとって、カナダは幻想と神秘の国なのである。

誰もいないロマンチックな草原を一人でどこまでも歩き、木洩れ日の美しい森を通り抜けると、そこには今まで見ることのできなかつた、まるで新しい世界を発見したかのように素晴らしい景観にはつ

こう書かれていた。
私は鍋田さんを通してカナダを知り、日系カナダ人を知った。それは小さなカナダ、ごく小さなカナダなのかもしれない。しかし、カナダは鍋田さんを通して身近な国となつたのである。

とさせられるだろう。そして、私が悲しい時、きつと森にさすさんさんとした太陽が私の悲しい心を暖めてくれるだろうし、楽しさに酔いしれて有頂点になっている時、あの氷河で削られたロッキーマウンテンは私の心を突き刺すだろう。また精神が安定しない時、静寂しきつた湖が私にその静寂をいくらかでも分けてくれるだろう。何か思いにふけりたい時は、のどかな草原の穏やかさが考える題材を与え、私をミス・アン・シャリーと同様、想像の世界で楽しませるだろう。

カナダは、私の前に、威厳たつぷりの顔をして魔法使いのごとく立ちほだかることだろう。私が想像できないほど広い草原とロッキーマウンテンの山々、それに囲まれた静かな湖を目の前にしたら、私は、その広大さと神秘性にうろたえ、そこに存在する無数の魂の声を聞くことができることだろう。

カナダは、誰にも邪魔されない雄大な自然に、犯すことのできない威厳があり、

その大自然は人間のクリエイティブな考えを寄せつけない。たとえ人間がかってにクリエイティブしても調和しない。まるで一つ一つの木や石や山にそれぞれの違った何かを持っているような、人間の力をはねのけてしまふような、そんな気がする。ことばのないコミュニケーションが成立するのならば、きつとそんなカナダをおいてはないのではないだろうか。長い年月をじつと動かずにいる自然とディスカッションしてみたい。

何百年たつても時の流れの中を動くのを止められたタイムマシンのごとく変わることはないロッキーマウンテンを描いてみたい。どこをとつてもキャンパスに向かつて描きたくなるような、木杵を通してどこを見てもそのまま絵になる自然と静寂がカナダにはある。季節や天気により、木々や草花、山々の色が変化する、その変化は、何度同じ所を描いてもちがった絵にしてしまふだろう。そして、鉄柱や電線を気にせずに自然が描けるのだ。ああ、そういうカナダをおもいきりキャンパスにぶつきたい。でも、きつと最初はだれでも目をそらす気になれず、筆をもつたまま描く楽しさも忘れるのだ。美しいものを素直に美しくと表現できる目と心があれば、きつとカナダのとりこになれるのだ。

私がカナダに興味をもつのは、もちろん、自然だけではない。カナダ人が季節の変化の中で作ってきた生活様式や習慣、現代日本の若者に見られる関心事との違い、考え方についても知りたい。

ケンアタチ氏のカナダ日系史——もともと存在しなかった敵 (The Enemy That Never Was)——は、原稿の段階でも閲読の機会を与えられたものだが、豊富な資料を駆使し、一貫した視点でまとめあげた力作であり、カナダ日系史のスタンダード版として長く名をとどめるものと思われる。カナダの日系社会が、いかに理不尽の偏見と差別にさらされてきたか、有無をいわせない形で読者につきつけるアタチ氏の叙述には、怨念に裏打ちされた一種の迫力があり、強い説得力をもっている。これは加害者側——いわゆる白人社会の一部——に是非読んでほしい文獻の一つである。(本書は、すでに日本カナダ学会の『カナダ研究年報』創刊号(一九七九年)で今井輝子氏がていねいに書評しているので、関心のある向きは、是非、同誌を参照していただきたい。)

とにかく、資料の豊富さ、構成のみごとさ、視点の一貫性、さらに文章力と、どの点からみても、歴史書として本書は第一級のものといつて過言でない。著者アタチ氏が、大見得を切っても少しもおかしくないほどの出来栄えになっているのに、私を感心させたのは、本書のもつ限界を、著者がたれよりもよく知っているらしい点である。序文の中でアタチ氏は、この本はけっしてカナダ日系社会の全容をとらえているものではないと言、別の立場で書けば、まったく別の日系史が可能であるはず、と説明している。自分が提示するのは、限定された一つの見方にすぎず、日系カナダ人の全史(ゼネ

ラル・ヒストリー)を書く意図は最初からなかった、とはっきり述べている。

こういう言い方を、著者の外交辞令的な謙遜と受取る向きもあるかもしれないが、私はこれをきわめて正確な、著者の自己評価と解している。

いったい、歴史叙述が、はたして全容をとらえるものなのか、個別史を超えた全史というものが、はたして成り立つものなのか、という議論も起こりそうだが、私には答えられない。全容をとらえるというのは、もともと不可能な話。私たちに可能なのは、限られた一部分を管

見することのみ、というのが美相なのかもしれない。

ということであれば、アタチ氏が提示する日系カナダ社会の像と、私がいただく日系カナダ社会の像との間に、ある種の食い違いがあつたとしても、それはむしろ当然であろう。とにかく食い違うのである。

話は飛ぶようだが、たとえば日系野球チームのアサヒ軍のこと。少年時代、このアサヒ軍の熱烈なファンだった私にとって、毎シーズンのアサヒ軍の活躍ほど、胸をおどらせるものはなかった。私だけ

でなく、日系社会全体にとつても、アサヒ軍の戦績は、大きな関心事、大げさにいえば日系社会最大のイヴェントの一つだった。私はそう記憶しているのだが、何年か前の『サ・ニュー・カネーディア』紙で、トヨ・タカタ氏がアサヒ軍は日系人にとつては、まさしくフオーク・ヒーローだつたと書いている回想記を読み、我が意を得たりと思つたことだった。

アサヒ軍は、その所属リーグをときどき変え、その戦いの場が、ときには草野球場然としたパウエル・グラウンドになつたり、ときにはもつとましなコン・ジ

ョーンズ・パークになつたりしたが、私は子供に許される限り繁々と両方の球場に足を運んだものだった。忘れ難い選手や試合も多い。一九三五年ごろだつたか、日本から遠征してきた、格段に力のまざる東京巨人軍を相手に、果敢に戦つた——もちろん勝てるはずはなかったが——アサヒ軍の姿を、いまも忘れることができない。(それにしても、剛腕スタルヒン投手その他の名手を擁していた草創期のジヤイアンツのいかに颯爽として強かつたことか。しよばくれた現巨人軍のことを考えると、今昔の感にたえない。)

いや、アサヒ軍の話をしだしたら、きりがない。私がいたかつたのは、かつての日系少年のあこがれの的だったばかりでなく、カナダ日系社会のコミュニティー意識の形成にはかりしれないほどの貢献をしたアサヒ軍のことが、アタチ氏のすぐれた日系史の視野に入つてこない、ということである(一回だけ簡単な言及があるが)。あるいはスポーツ——そう、たかがスポーツ——は、文化史とか社会史の領域に属することがらであり、すぐれて政治史的なアタチ氏の日系史の関知するところでないのかもしれない。しかし、私には、長い歳月をかけてようやく陽の目をみたカナダ日系史が、こういう面を素通りしているのが少なからず残念なのである。カナダ日系社会には、集団としての喜怒哀楽があつたはずである。アタチ氏の描くところでは、日系社会に「喜」も「楽」もなかつたかのごとくである。あるのは、ひたすら迫害され、差別されてきた日系社会の「怒」と「哀(かなしみ)」のみ。実態は、そうだったのか。

集団がもつ人間的な喜怒哀楽の全容に迫るのは、結局、歴史ではなく文学の仕事、ということになるのかもしれない。大河小説の形で、日系カナダ社会の一世紀にわたる苦難の歩みを、その喜びや楽しみをも視野に入れながらとらえうる、力量ある日系作家が出てこないものだろうか。カナダ日系史を読みながら、そんなラチもないことを、私はときどき考えたりするのである。(東京大学教授)

カナダ日系史を読んで ひとつの感想

平野敬一

